

ケルティース・イムレ著
「運命の不在」
(要約版、未定稿)

ケルティースの処女作は自伝小説であり、主人公の僕 Köves György の回想で構成される。1944 年から 1945 年にかけて起きた個人的事件にもとづく。主人公は 15 歳。それまで「人種」のことも、「宗教」のことも、考えたこともなければ、考えるきっかけもなかった。戦争も末期。ブダペストに空襲警報が鳴らされるまでに事態は進行していた。これが小説の舞台背景である（注釈）。

父との別れ

1944 年のある日、父に労働キャンプへの召集が来る。僕は学校を早引きして、父の仕事場（店）で待ち合わせる。そこから父がキャンプへ持参する荷物の買出しをした。家に帰り、父は商売の資産を知人の実業家シュトゥーに引渡す。シュトゥーは引き取り資産の一覧表を作成し、契約文書を交わそうとするが、父は必要ないという。そういう文書が残るのも災いをもたらしかねないし、仮にそのような文書をもらっても、世の中には確実なものはないから、文書には価値がないという。シュトゥーは継母と僕の生活を守るから、安心して欲しいという。

夕方からは親戚一同が会するお別れの夕食となる。ユダヤのお祈りがなされるが、僕には良く分からない。叔父が別室に僕を呼び、事の顛末を教え、一緒に祈るように誘うが、やっぱり良く分からない。ただ、もう父とは離れ離れになる。もう会えないかもしれない。これからは継母と一緒に過ごしていかなければならない、という感情が次第に心を占める。実母は引越して来いというが、継母と過ごした生活があり、父もまた継母の面倒を見るように言い残し、そもそも裁判所が父を僕の扶養者に決めたのだから、継母と生活するのが自然のような気がする。

僕たちが外出する時には、常に黄色いリボンを付けなければならない。父が発してから、僕はチェペルの軍需工場で働くことになった。黄色いリボンで市外へ出ることは禁じられているが、軍需工場の特別な身分証明書があるから安心して出かけられる。会社には僕と同じような少年、そう僕と同じ「人種」の 15 歳前後の少年たちが働きに来ている。

チェペルの出来事

1944 年の夏、いつもの通り、バスに乗って仕事に出かけた。チェペルの入り口で急にバスが止まった。警官が一人入ってきて、「ユダヤ人は降りろ」という。はて、僕には特別の証明書があるから、何かの間違いだらうと思うが、僕たち仲

間を下ろして、バスを追いやった。僕は特別証明書を見せるが、警官は関知しない。何かの誤解だろうと思いながら、次々にバスから召集される友人たちを待ち、ラッシュが過ぎたところで、皆で税関の空事務所に徒歩で進む。いろいろ警官に質問するが、彼には権限がないから何も知らない。上司と連絡をとろうとしているが、なかなか打ち合わせが出来ないようだ。

そうこうしているうちにお昼になり、午後も遅くなる。ようやく出発の打ち合わせができたようで、次の目標に向かって徒歩で進む。どこへ行くのか、ただ歩くだけだが、しばらくしてレンガ工場の入り口に来る。工場の入り口には警官ではなく、兵隊が立っている。威厳のある将校がやってきて、「検査は明日だ」。それまで、「このユダヤの奴等を馬小屋に留め置け」と命令する。いったい僕等に期待されているのはどんな役割なのか、さっぱり分からない。継母は夕食を作っているだろうに、連絡をとりようもない。

もう僕らは列車の中にいる。喉が渇くが水はない。レンガ工場の「検査」で聞かれたことは、結局のところ、ドイツに働きに行く気があるかどうかだった。遅かれ早かれいずれそうなるということだから、レンガ工場に集められた皆は提案を歓迎した。どこへ向かうのか何も知らされないが、3日3晩雑居の貨車に揺られた。空腹と渇き、女性も混在するなかの貨車の情景は、これまで体験したことのない経験だった。

アウシュヴィッツ

どこに着いたのかわからない。やがてそこがアウシュヴィッツだと分かる。膨大な敷地にバラックが並んでいる。その通りを進むうち、蛇口を見つける。とにかく喉が渇いている。「nicht trinken」とあるが、飲んでも良いかという質問に、案内の兵隊は無言でうなづく。医師の検査があり、そこから浴室でシャワーを浴びると説明される。何百人も一緒だが、一人の検査はほんの数秒。それでも、長い列の後ろにいる者は20分も待たなければならない。着衣を脱ぎ、すべての装飾品を外し、浴場への行列に並ぶ。遠く向こうの列には女性や老人たちが並ぶ。

シャワーをかぶった後で、髪が刈られて丸坊主になった。囚人服を着て、夕食を待つ。スープが到着して、味見をするがとても食えない。横から兵隊上がりが口を出す。まずいものでも、そのうち慣れるさ。生きていくためには食わなきゃならない。今まで気が付かなかったが、さっきから何か変な臭い匂いが漂ってくる。この匂いには覚えがある。そう、チェペルの皮革工場のそれだ。どこから来るのだろうか。見上げるともくもくと煙を上げている煙突がある。ありゃひょっとして火葬場か。それだけ伝染病が流行っているのか、いやに消毒剤を丹念に掛けられた。あの水も汚染されているのかもしれない。それにしても、伝染病で死ぬ者がそれほど多いという訳か。いや待てよ。あれはもしかして、向こうに並ばされていた老人、女子供の焼却炉か。

後から勘定してみると、不思議なことだが、アウシュヴィッツにいたのはたったの3日。4日目の夕方にはもう列車、そうあの貨車に乗っていた。ブッヘンヴァ

ルドが目的地だとは知らされたが、今度ばかりは身構えた。3日の道中を経て、ブッヘンヴァルドの朝に到着した。

ブッヘンヴァルド

アウシュヴィッツに比べ、田舎だが、生活の臭いがするプラットフォームだ。ただ、囚人たちでなく、ここでは兵士が貨車を開けた。そこからは、まるで定規で測ったように事が進行する。本当に規律だって動く兵士に驚いた。殺風景なアウシュヴィッツに比べ、「ぶなの森」を意味するブッヘンヴァルドにはまるで別世界が広がっている。収容所の廻りは緑に溢れ、小綺麗な建物が並んでいる。木々の合間から見える遠くには瀟洒な住宅も見える。アウシュヴィッツに比べて、よほど親近感を覚える。ここでは役割を与えられた囚人たちもよほど親切に振舞っている。昔からの住人がリボンなどの必要携帯品の世話をしてくれる。黄色の三角形のリボンに「U」、つまりハンガリー人を示す文字が入る。帯には僕の番号64921番が記されている。

ここでは朝から熱いスープが出る。パンも3分の1。アウシュヴィッツのように、気まぐれに、日によって4分の1、5分の1というのとは違う。昼には具沢山のスープがだされ、肉切れも入っている。幸運な時には小片がある。これがいわゆる我々の用語でZulage（おまけ）と呼ばれる奴だ。もちろんブッヘンヴァルドにも焼却炉があった。しかし、たったの一つだけだ。アウシュヴィッツと目的が違い、こう言い切っては語弊はあるが、収容所の仕事でどうにも使い様がなくなった者だけを焼くのだろうから。

ここでは、収容所を隔てる鉄線には電気が通っていないが、夜中にテントから出れば犬が追いかける仕組みにはなっている。夕方になると、囚人たちの交換市が開かれる。衣服、パン切れ、缶詰などが交換されるのだ。明日のスープやパンの交換も行われる。

物知りによれば、この収容所が開かれてから7年という。それ以前に収容された囚人たちもここにいる。こういうのも変だが、ワイマールの町に近いこのブッヘンヴァルドがすぐに気に入った。

ツァイツ・キャンプ

ブッヘンヴァルドの収容所から北に徒歩で20分ほど行ったところにツァイツ収容所がある。そこが最終的に落ち着き場になった。残念なことに、ブダペストからの道中で知り合った友人たちと離れ離れになる。ここには焼却場もあのシャワー室もない。そういうものが要のない収容所なのだ。

整列点呼が始まり、廻りを見渡すが、知り合いはいない。僕を見ている男がいる。尋ねるとブダペスト出身だという。僕の経緯を話して、それから彼の経緯をと思った瞬間、思い切り顔面を殴られた。黒服に固めた男が、「Ruhe」と叫びながら、倒れた僕の顔面を踏みつけていた。また別の集団に向かったところで起き上がった。廻りの連中が気を遣ってくれた。その中の一人が、ツイトロン・バ

ンディだった。ウクライナの労働キャンプからアウシュヴィッツを経て、ここに来たのだ。24歳のがっちりした体格の男だ。ブダペスト出身のホルマン叔父さんはドイツ語がよくでき、通訳的な仕事もしていた。ホルマン叔父さんの説明によると、あの黒服の連中は刑務所から送られた凶悪犯たちで、こうやって収容所の規律監視（Lagerältester）の仕事をしているという。連中はユダヤ人でなく、ただの犯罪人で、緑のリボンの「Z」が目印だという。

ツイトロン・バンディと始まったツァイツ生活は苦にならなかった。点呼と仕事を抜かりなくやっていれば、ここでの生活も悪くはなかった。バンディとも話したが、これがツァイツでの我々の黄金時代だった。

苛立ちと入院

秋が過ぎ、冬が近づくにつれ、倦怠感と苛立ちが募るようになった。雨と寒さの中、セメント袋を運ぶ仕事があった。セメントが袋からこぼれることに無頓着で進んだところで、監視の民兵が駆け寄ってきた。「この馬鹿野郎。貴重なセメントをこぼしやがって」とぶん殴り、顔を泥に落ちたセメントに押し付けた。

とにかく、僕は寒さと空腹、倦怠と苛立ちで、ほとんど力を失いかけていた。そんな日々を送る中、膝の痛みが日に日に強くなり、一人で歩けなくなった。膝の傷が膿んで、蜂窩炎になっていた。バンディがキャンプの病院に連れて行ってくれた。ここから僕の病院生活が始まった。

「U」のマークを付けたハンガリーの医師が「F」のマークを付けたフランスの医科長と話をつけてくれた。麻酔のない、汚れたシートで覆った手術台で、膿を出す切開手術が行われた。病院の助手、つまり看護師は「P」（Pflege）を付けている。もちろん、医師も看護師も収容所の囚人だが、専門職で生きている。看護師はてきぱき仕事をこなし、患者にやさしい。厳しい冬の最中、こうやって病院バラックのベッドに入れるのは幸運というべきだろう。隣のベッドには今にも死にそうなハンガリー人がいた。

ある日、どかどかと看護師が現れ、隣のベッドの患者を抱えて、移動の台車箱に乗せようとした。患者はか細い声で「抗議する」と叫ぶ。「何だと。お前はまだ生きていたいのか」（Was? Du willst noch leben?）。すでに何体かが乗せられている移動箱に乗せられた。「まだ生きていたいのか」。強制収容所でこの言葉の意味することは自明だ。やっぱりここにも、アウシュヴィッツと同じ仕組みが働いているのか。

その途端に、僕の目の前にも手が伸びてきた。有無を言わず、僕もその台車に乗せられた。「ああ、これが最後か」。そう思うと、土の色も、遠くの風景も、いとおいしい。台車はブッヘンヴァルドへ向かった。収容所のバラックの間から、夕食のスープのが匂う。「人参スープだ」。ガス室に送られるのか、それとも別のやり方があるのか。できるなら、僕がそれを決めたい。でも、許されるなら、もう少しだけ、この収容所で生きていたい。

奇跡

シャワー室に運ばれた。いよいよガスで始末されるのか。ところが、勢いよく噴出してきたのは温水だ。信じられないことが始まった。こんなに暖かいお湯、それもこんなに勢いのある温水に出会ったのは初めてだ。シャワーが終わると、看護師が体を拭いてくれ、新しい服にが与えられた。

何だか狐につままれたようだ。病室バラックも、ベッドが一つずつ並べられ、整然としている。医師も看護師も、テキパキと仕事をしていて、まるで自治組織のシステムが機能しているようだ。それにしてもおかしい。これには何か隠された意図があるのではないか。ハンガリー語で隣の患者に問い掛けて見る。反応はない。何度か繰り返すと、か弱い返事が戻ってきた。僕が尋ねる。「ここでは飯がでるのか」。「でない」という。やっぱりそうか。よく観察して見ると、バラックの隅々には拡声器が取り付けられているが、もしかして我々の会話が盗聴されているのではないか。疑心が広がる。

その途端に部屋の外から大きな声がかかる。「Saal sechs! Essenholen!」。看護師が食事をとりに行く。間もなく部屋全体にスープの香りが漂った。疑心は杞憂に終わった。

このブッヘンヴァルドの病院は不思議なほど良く機能している。看護師がカルテに記入しようと名前を聞く。「64921番です」。「いや、君の名前だ」。収容所は名前のないところだが、初めて名前を聞かれた。そのポーランド人の看護師は「Kerwischtjerd」と書く。ここでは医師の巡回もある。毎朝、「Guten Morgen」と主任医師が回ってくる。看護師を振り返り、2-3のことを確認すると、「Kewisch... Was? Kewischtjerd!」と読む。気の利いた返事をして、僕の存在を認めてもらう術も心得た。

部屋の拡声器を通して聞かれる各種の命令は、毎日、定刻どおりだ。たとえば、最初の頃、「Elá zwo, Elá zwo, aufmarschieren lassen!」という召集連絡が耳についた。もちろん、Zwoはzweiだが、EláはL.Ä.、つまりLägeraltesterの略なのだ。収容所の監視役にも二通りあるということか。収容番号がもう9万を超していることを考えれば、当然か。やがて空襲警報が鳴り出す頃には、「Krematorium ausmachen!」という命令で度々目を覚まされた。その1分後に同じ命令が繰り返されるが、今度は「Khematorium! Sofort ausmach'n!」と、苛立った声に変る。ほんの少しの種火でも、襲来する飛行機に見せたくないとういことだ。

次第に聞かれるようになったのは、「Alle Juden im Lager sofort antreten!」だ。やはり苛立った声で、「Lägeraltester! Aufmarschieren lassen! Lägeraltester! Wo sind die Juden?!」という命令も聞かれるようになった。

はっきり言えることは、最後まで台所は規則どおりに機能していたし、医師の巡回も定刻どおりだった。ある朝、コーヒー・タイムが済んだ後、どたばた走る音が聞こえ、大きな叫び声が聞こえる。我々の看護師も急いで荷物をまとめ、どこかに去ってしまった。9時頃だったか、兵士への命令が下った「An alle SS-Angehorigen」と二度繰り返した後、「Das Lager sofort zu verlassen」と。そして、

午後も4時頃だったか、ここの Lägeraltester、そうあの看護師の声が拡声器を通して聞こえてきた。「Kameraden」と少ししゃくったような、しかし鮮明な声でこう言ったのだ。「Wir sind frei」。ここにあの看護師がいるということは、あの医師の先生も同じ感慨でこの放送を聞いているのだと思った。この同じ放送がいろいろな言語で響き渡った。

台所の調理場担当だった連中に台所の占拠を頼み、収容所の皆にグヤーシュ・スープを作ろうということになった。僕もようやく、自分が自由になったという気持ちになった。

ブダペストへの帰還

アメリカの占領地の境界までアメリカ軍のトラックで、その後はソ連軍の領内を通過し、ドレスデンからブラチスラバまで列車で移動した。

ブラチスラバの駅に降りた途端、多くの人に囲まれた。「強制収容所から戻って来たのか。こういう名前の男と会ったことがないか、こんな風貌だが」と、縁者や関係者が僕らを取り囲んで矢継ぎ早の質問をする。収容所では名前がないから、名前を言われても分からないし、収容所生活で顔つきも変っているから、答え様がない。「ガス室を見たか」という質問もあった。「それについては今話したくない」と言うと、「そんなことを言わないで。ガス釜があったかどうかだけ言ってよ」と言う。「もちろんガス室はあるよ。どの収容所にも。アウシュヴィッツでも確認したが、僕はブッヘンヴァルドから戻ったんだ」。「ちょっと待って。ということは、君はガス室について聞いたことがある」。「もちろんです」。「でも、自分の目で確認した訳ではない」。「そうです」。列車が出発するので、急いで飛び乗った。

ブダペストの西駅に到着した。すぐにバンディの家に向かった。ドアをノックすると、扉を少しだけ開けた娘がいた。顔つきから妹だろう。「まだブダペストに戻っていない」という。僕はそこから電車に乗った。途中で検札が来て、切符を見せろという。無いなら買うか、すぐに降りろという。このやり取りを見ていた一人の紳士が、検札を叱りながら切符を渡す。「君はドイツから戻ってきたのか。強制収容所からか」。「もちろんです」。「どこの収容所だ」。「ブッヘンヴァルドです」。「ナチの地獄の一つだ。いったいどこからか攫われたんだ」。「ブダペストから」。「どれほどいたの」。「1年です」。「みんな見てきたんだらうな、坊や。恐ろしいことを。でも、肝心なことは、もう終わったということだ」。再びここに戻ってきて何を感じるかというから、「憎しみです」と答えた。「時と場所によって、憎しみにも役割があるし、利点もある。だが誰にたいして憎しみを覚えるのかね」。「皆にたいしてです」。少し時間を置いて、「たくさんの悲惨なことに直面しなければならなかったのだね」。「何を悲惨というかによります」。「そりゃそうだが。さぞかしお腹がすいたり、殴られたりもしたんだらう」。「当然です」。「どうしてそんな風に言うんだ」。「だって、強制収容所なら、それが当たり前でしょう」。「それはそうだが。しかし、……。しかし

強制収容所は当たり前のことではないからね」。互いに違うことを議論しても仕方が無いと思ったので、答えなかった。彼もまた、分かっていない奴、つまり子供と議論しても仕方が無いという顔つきであった。

電車を降りようとする、その紳士も一緒に降りてくる。「こうしたことがどうしてまたどのようにして起きたのか、世界はまだ分からずにいる。君の経験を書いてみるつもりはないかね。僕にたいしてではなく、世界にたいして」。「でも、何についてですか」。「収容所の地獄だよ」。僕はこれに答えることができなかった。地獄は知らないし、考えてみたことも無いからだ。「収容所を地獄と考えるのが間違っているかい」。「僕が知っているのは強制収容所です。それについては知っているけれど、地獄は知らない」。「そうは言うが」。「それなら、飽きることの無い場所なら考えることができます。強制収容所がそれで、条件によってはアウシュヴィッツもそうです」。「で、それをどうやって説明できるの」。「時間です」。「どうやって」。「時間が助けてくれるんです」「助けてくれる。何を」。「すべてをです」。

この紳士は分かれ際に、自分の名前と新聞社の住所を書いた紙切れを渡してくれた。その気になったら、尋ねてくれと。僕は姿が見えなくなるまで待って、その紙切れを捨てた。

運命の不在

家に辿り着いた。ノックをすると、見知らぬ女が少しだけドアを開ける。「どなたをお探して」というから、「ここの住人です」と答える。閉めようとするから、足をドアに挟む。「何かの間違いでしょう」という。家の番号を確認しようとしたところ、ドアから離れて上を見上げた瞬間に、ドアを閉められた。

仕方なく階段近くまで戻り、フライシュマン叔父さんのドアを叩く。居間に招かれ、話し始める。「父の消息は?」。少し時間をおいて、叔父さんは手を高く掲げ、それから「訃報だよ。残念ながら、間違いはない」という。「同僚の目撃だよ。苦痛は短かったそうだ」。「ドイツの収容所だ。そう実際にはオーストリアの領地の、あの、...そう、マッヘンハウゼン、そうマッヘンハウゼンだ」。

それから母の消息を尋ねた。元気であるという。「それから、継母はどうしていますか」と興味を示すと、「あー、もう嫁に行ったよ」という。「で、誰のところへ」。「良く知らないが、コヴァーチとか何とか言う。いや、コヴァーチでなくて、フトー」。「シュトゥーじゃないの」。「そうそう、シュトゥーだ。いろいろ世話になったと言っていたから」。

僕はソファを動かして、ボルドー色の生地をなでた。「叔母さん。僕がここに最後に座った日のことを覚えていますか」、と唐突に聞く。「アウシュヴィッツへは、バスで行くのか、それとも列車で行くのか議論していた時ですよ」、と僕は少しはにかんだ。

「君の道程が、ここから一直線に収容所の地獄に続いていなたんね、分かりやしなかったよ」。僕は静かに、「収容所は地獄じゃない」と言う。「何だって。

わしゃ地獄しか思い浮かばないよ」。「僕は地獄なんて考えたこともないよ」。「どこが違うの」と叔母さんが中に入る。「つまり、地獄はないが、収容所はあるってこと」。「‘あつた’、てことでしょう。幸運にも、もう終わったことから」と僕の頭をなでた。

「これからどうするかを考えなくっちゃね」。「どうするって?」。「まず、あの恐ろしいことを忘れることだ」、と叔父さんが言う。「どうして?」。「どうしてって、生きるためだ。自由に生きるためだ。あんな負担を背負って新しい人生を始められるわけがない」。「じゃ、僕の昔の生活はどうなるの。それをどうすれば良いの。あれだって、僕の人生の一部だった....」。「それが終わったんだよ。あの時は、僕らには別の運命が待っていたんだ」。

僕は頑固に言い張った。「でも、僕はその運命も受け入れたんだ」。「それは誰もが受け入れたんだ」、と叔父さんが言う。「別の選択肢はなかったんだ。だが、今は自由になったんだ」。「あの時だって自由だった」と僕は抗弁した。いつも時間があった。関税事務所ではまる一日過ごした。アウシュヴィッツでは医師の検査のために、少なくとも30分は待った。どこでも、どの時間でも、別のことが起きて不思議じゃなかった。アウシュヴィッツでも、ここでも。父と別れる時もそうだった。

「じゃ、何ができたと言うのだね」。「もう十分だよ」と叔母さんが間に入った。「ジュルカ。おまえはくたびれている。長い旅立ったからね。休まなくっちゃいけないよ。お母さんだって待っている。すぐ行っておやり」。

何も大げさに言うことはない。生きなきゃいけないってことはよく分かっている。継続できないような僕の人生を続けるだけだ。はっきりしていることは、生きていけないような無能力なんてありはしない。僕は分かっている。僕の行く手には避けようのない落とし穴や、歓喜が待っている。あの焼却炉がある所にだって、苦痛の合間には歓喜に似たものがあった。皆は悲惨なことばかりを聞いたがるが、僕にとっては忘れることの出来ない経験として残っている。そう、今度聞かれた時は、強制収容所の歓喜について話す必要がある。同じ事を聞かれれば、僕だった忘れることもないだろう。

- 完 -